重要文化財金剛輪寺二天門保存修理工事について

上席研究員　古荘　貴也

１．はじめに

金剛輪寺二天門は、令和４年度に耐震診断を行い、令和５年６月から令和５年11月で保存修理事業が完了した。当協会ではこの工事の耐震診断及び設計監理を行ったので、その概要について報告を行う。

２．金剛輪寺の概要

図１　金剛輪寺配置図

金剛輪寺は滋賀県愛知郡愛荘町大字松尾寺に所在し、秦川山の西斜面に寺地を構える。

天平13年(741)聖武天皇の勅願により行基が開創した。その後、平安時代に移り荒廃していた寺を嘉祥年間(848～50)に、延暦寺の僧円仁が天台宗遮那止観双弘の道場として再興したという。降って中世前半は三重塔・本堂および二天門の建立・諸仏の造立や経律論の書写などが行われ、寺は大いに隆盛する。しかし後半になると支配階級の変化に伴い寺の経営も困難となった。近世には御朱印状を下附されたがとうてい往時のような経済状態にはならなかった。このための諸堂の維持管理も困難を極めた。しかしそれでも本堂をはじめ諸堂の修理を度々行っている。

寺は元禄年間には輪王寺末より曼殊院末となるが、現在は近接する西明寺・百済寺とともに延暦寺に属する。

３．二天門の概要

構造形式：桁行三間、梁間二間（三間一戸八脚門)、一重、入母屋造、檜皮葺（元楼門一階)

二天門の建立年次を明らかにするものはないが、蟇股などの細部様式からは室町時代中期であろうが、組物（枠肘木）が古式のためそれより少し遡るとも考えられる。

現在の二天門は、構造形式は八脚門である。しかし寺伝によれば元楼門であったが、江戸時代中頃に二階部分を取り壊し現在のような姿になったとされる。

建立後の修理は寛永11年、元文２年、寛保元年に屋根葺替、また天保３年に石垣積、同

４年には小修理されている。なお、上記修理年の前半は楼門、後半は二天門または二王門と記されている。その後の修理としては記録にないが、明治40～44年の本堂解体修理の折に、二天門も根本的な修理を受けたことが、柱や軒桁などの取替材でわかる。

昭和20年に指定後、昭和63年に屋根葺替工事の他、木工事、左官工事、雑工事が行われた。

４．工事概要

（1）破損状況

昭和63年の屋根葺替工事から35年が経過し、屋根檜皮が劣化し、西面中央軒付に腐朽が見られ、箱棟にも部分的に腐朽が生じていた。

（2）工事内容

耐震診断及び屋根葺替・部分修理。

令和４年度に建造物の耐震診断を実施し、耐震補強が不要という結果が出た。令和５年度は屋根檜皮葺の全面葺替えの他、野木舞、小屋組及び箱棟の腐朽破損の修理、鬼板と箱棟の屋根板および障泥板は上端のみ銅板巻き、土壁の清掃、千社札の撤去を行った。

前回の工事では、軒付廻りや平葺きに半皮（長さ約380㎜）を混ぜて葺かれていたが、屋根の耐久性を考えて本工事では全皮（長さ750㎜）で葺く事にした。しかし前回の工事では軒廻りの落込みは半皮に合わせた位置に作っていたので、１番母屋から野垂木の先端を下げて落込み位置を奥に下げて施工した。

箱棟は上端を銅板で覆っていたので、腐朽は障泥板の一部のみで済んだ。しかし鬼板は木地のままで腐朽が進んでいたため、本工事では鬼板の上端のみ銅板を掛けることにした。上端にはしのぎがついていたため施工しにくかったが、少しでも耐久性が上がることを期待する。

おわりに

本稿作成にあたり、金剛輪寺及び工事関係者の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

図２　修理前状況

図３　野木舞取替え状況

図４　軒付廻り調整状況
鼻母屋を下げて軒付廻りの落込みを確保する。

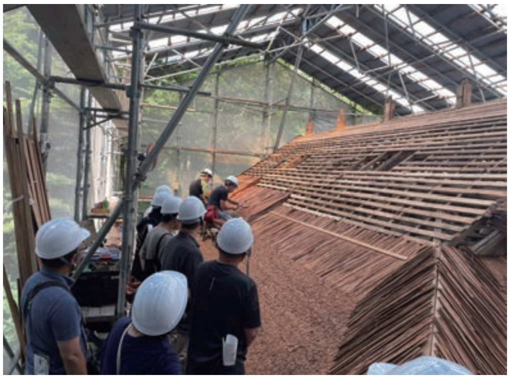

図５　現場見学会

図６　箱棟取付け状況
障泥板は取替え、その他は再用。

図７　竣工　鬼板新調、上端のみ銅板巻き

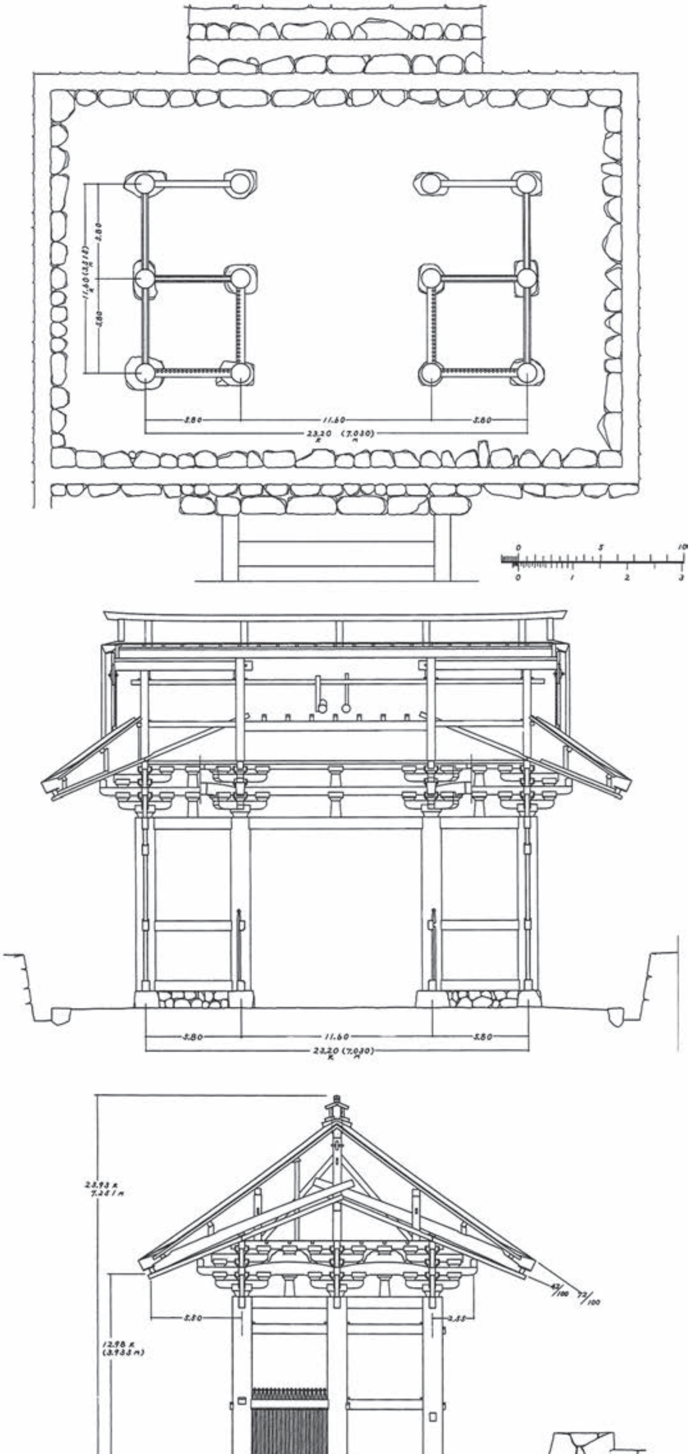

図８　金剛輪寺二天門
平面図、桁行断面図、梁間断面図